

持続可能な(Sustainable)、の鍵

コロナ禍以降、「持続」という言葉をよく耳にします。政府が中小企業や個人事業主を守るための緊急支援に「持続化給付金」を支給し、その制度の盲点を突く若者たちが「持続化給付金詐欺」を働くなど、印象的にはコロナの負の空気も背負いますが、そもそも変化を意味する接尾語の「化」を補って、「持続の状態にする」との含みを持たせた「持続化」は、意図を正しく表現しているのでしょうか。

「持続」はもちろん、関係や効果の継続を意味する普通の日本語ですが、2015年の国連サミットで、持続可能で多様性のある社会を実現するための、国際的な「持続可能な開発目標(SDGs)」が提唱され、このSDGs (Sustainable Development Goals)のサステイナブルを「持続可能な」と訳して紹介される中で、未来を見据えた今の在り方の意を含める使い方が、なされるようになったと思います。

調べてみると、そもそもこの言葉は水産資源の分野の専門用語でもあったようです。即ち、漁業の進化で漁獲量が上がるのは結構ですが、獲り尽くせば当然、将来的には魚がいなくなり、水産業も消費者もダメージを受けます。そうならないよう、互いにルールを決めて漁獲量を調整したのですが、やがて漁業だけの問題ではなく、化石燃料や鉱物等の限りある資源の採掘や、廃棄物の処理を完全に行うこと、森林開発の在り方等、地球環境の持続可能性としても論じられるようになり、専門のサステイナビリティ学まで起こります。

ただ、これの難しさは積極的に推進する熱心な人々がいる一方で、相変わらずの乱獲や大量の二酸化炭素の排出、環境破壊等が自国の都合ファーストで継続されていることです。趣旨は分かれど、未来より今が大事なゆえでしょう。プラスチック・ゴミ削減を象徴するレジ袋の不使用や、廃棄食材を減らすフードロスの取組みを「面倒だ」と一蹴する現実を身近に見るとき、お祖師さまが「日蓮が慈悲廣大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外、未来までも流るべし」と仰せのお言葉を想います。つまり、仏教は基本的に未来への相続を重視しますし、法華経は唯一、未来の人々の幸福をテーマに御法門が説かれますが、そんな未来のための生き方を実現するには、慈悲心の深さが鍵になるとお祖師さまは仰せなのです。未来のために今の自身を犠牲にし、最大の努力が出来るのは、偏に本気で相手を思う慈悲心があればこそです。これは持続可能性を実現する最大のキーワードで、理念の提唱やルールの整備、罰則の強化よりも着目すべき視点と感じます。

ところで、これは地球や国家規模の話だけではなく、私たちの信行も同じです。ご弘通の法城であるお寺が未来永劫に存続するよう、汗して努力できるのは慈悲心のなすワザです。我が組の未来のため、我が家の法灯相続のために骨を折って頑張る人もまた然り。うまくいかない人はここを欠きます。日々の信行を見直して菩薩行に努め、目先しか見ないご奉公は改めねばなりません。次世代のご奉公者や役中、信徒子弟の育成は、持続可能で健全なご弘通を生む土台ですから、ご信心も国の制度と同様に、その場しのぎでは実現しません。

(松風寺月報 令和2年12月号)